

をかける人がいます。振り返ると、息子が立っていました。息子は、私が家族を捨てたと思ひ込み、不登校に陥っていました。鬱積を抱えて上京してきたのですが、私の姿を見て憎しみは消え、こう言ってくれたのです。「俺、お父さんと一緒に仕事をしますよ」

「そうか、一緒にやるか」

ああ、生きていてよかった。

私は孤独ではなかったのです。よし、もう一度人生をやり直そう。息子のひと言によって、私は立ち直ることができたのです。あれから十三年。息子と始めた警備会社は、社員数六十三人にまで成長しました。妻とは平成七年に復縁。庭付きの一戸建てもプレゼントしました。苦勞をかけた妻へのせめてもの罪滅ぼしです。

この不況で、多くのサラリーマンが不安な日々を送っています。悩みが高じて自殺に至る人もいます。しかし、その気になれば何をしてでも生きていけます。仕事なんて、何回替わってもいいと思うのです。私自身、何度も職を替えるうちに自分の能力や適性がわかり、ガードマンという天職に出合えました。

大切なのは、どんな逆境でも決して諦めず、置かれた立場で一所懸命に努力をすることです。夜逃げは絶対に許されることではありません。いまは深い反省とともに、二度と失敗を犯すことのないよう、精一杯努力を続けています。そんな毎日にとっても充実感があり、いまは心底幸福を実感して生きています。

外部環境の厳しさは依然として続いています。が、事業の発展を通じてお客様、社員、家族の幸せを実現し、きれいな晩節を全うしたい。それが私の願いです。(なかじま・くににお)中島警備保障社長

## 第二のラフカディオ・ハーン

若松秀俊

大正末期から昭和初期にかけて、島根県の旧制松江高校現・島根大学)でドイツ語講師として教壇に立ち、日本の近代史に名を残す多くの逸材を育てたフリッツ・カルシュという哲学博士がいる。日本人には、その人物像はおろか、名前も知られていない存在である。

かくいう私も、その一人だった。だが、縁とは面白いもので

ある。ふとした出会いから私はカルシュ博士を知り、その生き方に魅せられ、ついにカルシュ博士について著書を執筆するまでになった。

そもそのまのきっかけは、平成十一年、システム工学の国際会議のために滞在していたドイツでの、ある初老の女性との出会いだった。その女性は、ホテルで朝食をとっていた私と助手のもとに近づいて「日本語の響きが懐かしい」と話しかけてきた。そして、おもむろに自分の父親が日本の学校で教えていたことを語り始めた。彼女こそカルシュ博士の二女・フリーデルンさんだったのである。

さて、カルシュ博士は明治二十六年、ドイツ東部の町に生まれ、母国の大学で哲学を修めたあと、大正十五年に憧れの日本にきた。赴任地に松江を選んだのは、彼がラフカディオ・ハーンをいたく尊敬していたためであり、ハーンより三十六年遅い松江入りとなった。カルシュ博士は十四年間にわたり学生の教育に尽力する一方、日本の哲学や宗教にも造詣を深め、それらに関する論文や著書を残した。太平洋戦争が始まる



と東京のドイツ大使館に勤務し、終戦後しばらくして帰国。昭和四十六年、その生涯を閉じた。博士の存在を知って、私がいま

驚いたのは、カルシュ博士のもとから日本の政財界、学界を代表するような数々の人材が輩出した点である。

例えば、政治家の赤澤正道や細田吉蔵、リーダー開発の功勞者・酒井勝郎、日弁連会長の和島岩吉、微生物研究の権威・奥野良臣、「長崎の鐘」のモデルで長崎医科大学教授の永井隆などである。ほかにも数え上げれば枚挙に暇がないほど有為な人物が青年期に薰陶を受けた。

では、それだけの学生たちに影響を与えたカルシュ博士とは、どういう人物だったのか。教育に携わる一員として、私の博士

に対する関心は高まっていた。そして、博士の有形無形の功績を記録にとどめるため、僅かな手がかりをもとに、時間を惜しんで全国を飛び回って博士の足跡を辿り、いまでも健在な教え子たちを訪ねて話を聞いた。

齢すでに九十前後の教え子たちは、カルシュ博士との交流の日々に話が及ぶと一様に目を潤ませた。「私がいまあるのはカルシュ先生のお陰です」と流涕する姿に接するたびに、博士への敬慕の念は一層深まっていた。紙幅の関係で詳述できないが、調査を通して私が感じたのは、カルシュ博士と教え子たちの間に真に血の通った教育が息づいていたことである。学生らはドイツ人講師という自分たちと生き方も文化も異なる存在に親しく接し、大いに感化されたはずだし、未熟ながら学生同士、刺激し合い、自由に議論できる雰囲気があったに違いない。

だが、それ以上に学生たちはカルシュ博士の教育者としての魅力に惹かれていた。博士もまた、微笑みを絶やさぬ温厚な人柄の内側に、誰にも増して日本を深く愛し、人々を慈しむ心を秘め、自分の持てる知識を惜

しみなく生徒たちに伝えた。そして、博士と学生が真剣に向き合い、ともに成長しようとする姿は、カルシユ博士の帰国後も国境を超えて続いていった。

師弟愛の心温まるエピソードは数多いが、例えば、永井隆は在学中、次のようなエピソードを残している。

永井と仲間五、六人がある時ドイツ語の勉強のためにカルシユ博士を誘って散策に出かけた。浜で石を拾い上げて「これは何ですか」とドイツ語で質問すると博士からは「ビムスシュタイン」という答えが返ってきた。その意味がわからずに困惑していると、今度は英語で「パミス・ストーン」という説明が加わる。それでもまだわからない。すると、カルシユ博士は一層、熱心な口調になり、筆談を交え「エルデ（地球）の内部から高温のラーヴァ（溶岩）が吹き出して海に流れ出る」という説明を始める。そこまできて、やっと石の正体が「軽石」だとわかる。このように、とことん学生の質問につきあい、途中ではぐらかさずに最後まで導くというのもカルシユ博士の一貫した教育姿勢であった。



後日談だが、カルシユ博士は昭和四十三年、教え子の招きで二十一年ぶりに日本の土を踏んだ。その際、長崎を訪れ、原爆被爆者のために命を捧げた永井の死を悼み、冥福を祈っている。

実は、私が「第二のラフカディオ・ハーン」ともいえるカルシユ博士に惹かれ、彼を顕彰しようとするのには理由がある。それは私自身、教育現場に身を置き、昨今の教育が、人間教育を見失い、いかに実利主義に走ったかを肌で感じるからである。私が関わる医学界でも暗記と知識による国家試験のみ重視され、「患者の身になって」「人間の尊厳」という言葉はどこかに追いやられた感があるのは否めない。

カルシユ博士をめぐる心温まる師弟愛はまさに人間教育の原点であり、そこから学ぶべきことは多い。博士の功績を広く知らしめるのは、私に与えられた使命と確信する次第である。

### 最後の将軍

徳川斉正

二百五十余年の泰平を誇った江戸時代。我が国が新たな歴史の一頁に向かう兆しは、黒船来航を機に決定的になったと言われる。大老井伊直弼が天皇の勅許を得ずに開国に踏み切る動きを見せたことから、公家や諸大名と幕府の対立が頭を擡げ、尊皇攘夷の動きに火がついたのはご高承のとおりである。

徳川慶喜公が江戸幕府十五代将軍となったのは、我が国がこうした行き詰まりを見せた時であった。

将軍慶喜公はその在職期間の短さ故に、あまり他の事績は語られることはないが、参勤交代制度の緩和など、将軍としての事績は意外にも多い。ただ、慶喜公には世界史上に輝く無血の

大革命ともいえる、大政奉還を決したという事績があり、その前では他の事績は霞んでしまうし、戦国の武将たちの武勳も遠く及ばない。

当時、アメリカ、イギリス、フランスなどの列強は、帝国主義を標榜し、我が国にも進出しようとしていた。もし我が国が内乱状態を呈すれば、列強はそれぞれ背後に付き代理戦争へと発展、我が国はいずれかの植民地となっていたことだろう。

私は、慶喜公の生い立ちを眺めてみて、その人となりこそが我が国を列強から救ったと思えてならない。大政奉還は、民を国を想い、そして故郷や祖先を想う中で決断されたのだ。

我が国の存亡を担った慶喜公は、天保八（一八三七）年水戸徳川家九代斉昭公の七番目の男子として江戸に生まれた。童名を七郎麻呂と称し、翌年には水戸に移され、五歳には水戸藩校である弘道館において、父や教授陣により厳しく育てられた。元服して松平昭致と名乗り、十一歳で一橋徳川家を継ぎ、時の将軍家慶公より慶喜の名を賜った。

歴代水戸徳川家は、光圀公の

遺訓ともいえる次の言葉に忠実であった。「我が君主は天子也 今宗室は将軍家也」

この思想こそが『大日本史』や幕末のバイブルともいえる、水戸学の礎となったと言っても過言ではなからう。この言葉はもちろん父斉昭公を通じて慶喜公にも伝わっていたに違いない。そこで、我が国だけではなく諸外国の情勢を見極め、大政奉還によって出来る限りの戦いを排して天子に政を返し、宗室である将軍家に咎が及ばぬように、恭順の意を込めて徳川慶喜家という別家を興されて謹慎されたのである。

徳川家にはそれぞれ背番号がある。水戸徳川家は背番号五番から、少なくとも四番目までに入らなければいけないはずだが、五番であるのはなぜか。二番に徳川慶喜家という別家が入っているからである。

歴史は、勝者が敗者の歴史を書き換えてきた。慶喜公は将軍家が極悪人にならないように、「この大政奉還劇は将軍家とは何ら関係のない徳川慶喜家個人がやらかしたもので、罪あらば、